今、子供のやる気を引き出すには

子供は何を求めているのか、それを親がどのように引き出すべきか

鷲田　小彌太

（講演　一九八八・十一・十三(日)一〇：三〇～於・江別小）

［1］　おそらく、主催者の方が望むようなし方で、今日のテーマに直接答えることは、効力あるハウ・ツウをのべることは、それほど難しいことではありませんが、皆さんにおいて、それの実行はほとんど不可能だと思いますので、あまり意味あることだとも思えません。ハウ・ツウについては、のちに簡単にのべるとして、私は別な行き方をしてみたいとおもいます。

ところで、私のこととしている哲学は、理屈です。屁理屈といってもよい。白を黒と、烏を鷺と言いくるめることも敢えてします。どうぞ、頭を集中してお聞きください。もとよりごく普通のことをかたるにすぎませんが。

［2］　しかし、与えられたテーマに、まずはこだわってみましょう。つまり、「今」「子供」「やる気」ということでは、いくぶん話ができると思います。ところで、さいしょにお断わりいたしますが、今日、私は、平均的な方たち、一番ぶ厚い、五〇％以上の層をなす方たちを対象にしてお話しようと思います。ですから、自分の子供を天才と思っている方にとっては、失望を与える結果になると思います。この点、ご承知おきください。

［3］　「今」とは「現代」ということです。「現代」とは何か、これが第一の問いです。「現代」とは、もう少し区切っていうと、七十年代以降のことです。この時代を、私たちは、漠然と過ごしています。しかし、未曽有の時代、これまで人類が経験して来なかった時代に突入しつつあるのです。どのような点で、このようなことをいい得るのか。人間たちが、変わることなく、守りつずけてきた三つのコード（タブー＝禁忌）があります。それが無くなれば、人間であることが解体してしまうとでもいうべき、本質のことです。

［3・1］　「人間の本質は労働である。」、これが第一のコード・テーゼです。平たくいうと、働かざる者は食うべからず、ですね。ところが、生産＝労働＝教育――教育の目的を、労働力の再生産、簡単にいえば、義務教育をへ、高校、大学を出て仕事＝労働につくこと、とする――が、人間たちの生活の仕方のなかで、第一義的な意味を失いつつあるのです。そして、逆に、非生産＝非労働＝教育というのが、大きな、傾向としてみれば、第一義的な意味をもちつつある、といえます。つまり、専門の知識や技術を修得する意味が、教育の目的から、減じつつあるのです。

もとより、学校は、教育をする、受ける場所に変わりはありません。内容が変わるのですね。人生＝仕事ではない、豊かな人生を送るための、多様な知識、方法を習得する場所という意味を大きくしているのです。

［3・2］　「近親相姦」、これが第二のコード＝タブー・テーゼです。たいそうオドロオドロしい言葉に見えますが、このコードこそ家族構成の原理なのです。家族のなかで、夫婦以外、性的交渉をもつことを禁じてきたのです。父と娘、母と息子、兄と妹、姉と弟の性交渉は、それを犯せば人間でなくなる、人間以下のものになる、とみなされてきたのです。こういう原理をもった家族のなかで、人間は人間を生産してきたのです。

ところが、家族は、核家族の極小形――子供を生まない、カップルだけの家族――をつきぬけて、子供を生まないのはもちろんのこと、結婚しないシングル＝非家族へと変貌しつつあります。この流れは、目に見えるほど、大きなものになりつつあります。つまり、家族を構成するコードが、不必要になり、解けてしまう、という実態が生まれつつあるのです。人間の生産・再生産の場＝生殖・養育の場としての家族が解体しつつあるということです。

もとより、私は、この解体過程――速度を変えることができても、流れ自体を止めることはできない――を否定的にのみ見ているわけではありません。かつて、性的活動は、生殖・養育活動に従属してきました。生まない性は、不毛であり、石女、といわれてきたのです。オナンは、手淫によって、不毛な性行為のゆえに、神から罰せられます。オナニイ、ですね。しかし、皆さんも経験済みのように、性行為は人間を解放にもたらす本質的な活動なのです。男と女の関係は、何かに従属すべきものとしてあるのではなく、それ自体、人間にとって基本的で、自由なコミュニケーションなのです。端的には、子供を生み・育てることから自由になった関係、ということです。家族の解体といわれていることは、単純にいうと間違いになりますが、性活動を人間本来のものとして取り戻すことを、その中に含んでいるのです。

［3・3］　「人肉食」（カニバリズム）、これが第三の、もっとも強固なコード・タブー・テーゼです。結語的にいいますと、人間を（捕獲し、飼育し、食糧として）食べなかった種族だけが、人間になったのです。

もともと。「身体髪膚、これを父母にうく」といって、体にメスを入れることに対してさえ、強い抵抗があったのです。人間は、この抵抗を、医療技術の展開によって、徐々にとり払ってきました。しかし、六〇年代の医療技術の高度化――とりわけ、臓器移植の可能化――によって、人間身体のあらゆる部分を利用可能になり、ほとんどメス等をいれる抵抗が無くなってしまいつつあるのです。

何よりも、「現代」では、長生きと健康とが最大の幸福である、とみなされています。健康社会、ヘルシィ・ライフの問題点に気づいていても、この幸福価値に抵抗することは、大変難しい。最近、大西巨人『地獄変相奏鳴曲』（講談社）の「閉幕の思想」を読んで、いたく感動しました。まだ気力も体力もある夫婦が、自分たちの手で生の幕を閉じることの意味を追及した小説です。

先端医療技術は、とくに心臓移植技術等は、生命の維持・延長、死の回避にとって、至福とみなされています。もう寿命を終えた、従来ならば、その時点でただちに死を意味する心臓が、新しいものに取り替えられて、再生するのです。人間は、ついに不老長寿の薬＝技術を獲得しつつあるのです。至福といわずになんといえばいいのでしょう。しかし、心臓移植等の先端医療技術は、実のところ、人間が、人間を飼育し、利用する、端的には、食べるという、人類が長い間禁じてきた人肉食への最終コースへと、私たちを誘っているのです。もう引き戻せない道程を、私たちは歩みはじめているのです。

［3・4］　もつとも、タブーとは、破りたいものです。破ると、気持ちのいいものです。だれでもそれを感じています。人肉食、近親相姦、非労働、等などみなそうです。（と、いってもわたしとて、ほとんど（？）経験ありませんが。ただ、パリの佐川君は、うまかった、といっていますね。信用していいと思います）。ですから、いったん長い

間人間社会のコード＝不文律となってきたタブーが破られると、脆いのです。あっという間に、コードはほどけてしまうのです。今まで、自明であると思われてきた「人間である」ということが、まったく頼りげなくなってしまうのです。これでも私は、なるべく小さめに言おうとしているのです。

つまるところ。「現代」とは、人間の生きる意味、目的ばかりでなく、「人間」それ自体の存在が、根本的に変化しつつある時代なのです。これまでを「人類史」といえば、「超人類史」「ポスト人類史」へとむかう過渡期を、私たちは生きているのです。

［4］ 第二に、「子供」、です。「子供」とは、自明な事実ではありません。たしかに、かつて私たちはみな子供でしたし、現在子供をもっています。日々子供というものを経験しています。

［4・1］ しかし、妙な言い方になりますが、「子供」は、昔から、子供であったわけではないのです。私たちが考えている子供とは、近代社会が生み出したものです。近代以前の社会では、子供とは、「小さな大人」を意味したのです。つまり、子供と大人との間には、根本的な区別、質的な差別はなかったのです。大人がすることと子供がすることとの違いは、量的なもので、子供もその力に応じて、大人になるべく、大人と共に、働かなければならなかったのです。

ところが、近代社会が生み出した「子供」とは、働くことを免除された、義務教育の対象者、を意味します。労働の免除と義務教育とは、一体のものです。では、なぜ、子供は、働かなくてもよい、その代わりに、義務教育を受けなければならない、そんな存在になったのでしょうか。正確に言いますと、子供は働いてはいけないのです。義務教育を受けなければならないのではなくて、親が教育を受けさせるべき義務を負っているのです。

近代資本主義社会は、労働力を商品化しました。それが利潤を産むのならば、性別、年令に関係なく、あらゆる労働力を生産の場にひきいれました。とりわけ、単純で、汚い、小回りを要求される場所の労働（狭い抗道での石炭運びなど）に、安い子供が大量に雇われた。（親たちも、なかば売るようなかたちで、子供たちを労働現場へ追いやった。子供の稼ぎが、生活費の、けっして小さくない部分をしめていたのである。しかも、子供の労働力の大量の参入は、大人の賃金水準を引き下げ、そのことがさらに子供の労働力の新規参入に拍車をかけたのであった。）苛酷で、不健康な条件下での労働によって、見るみるうちに幼い生命は侵され、次代の労働力の補給さえ危うくなる有様だった。正真正銘の、奴隷船による、外国からの幼い人身の輸入によっても、その不足を補うことはできなかったのである。それで、国家が、（総資本の利益を代弁して）、個々の資本家と親たちから、法的強制によって、子供たちを取り上げた、つまり保護したのであった。子供たちを、働かすことも、雇うこともならない、子供は労働を免除された存在である、という考えが自明のものとなるのには、このような歴史経過があったのです。近代資本主義社会では、子供は次代の労働力の予備軍です。教育は、この労働力を育成するためにこそなされるのです。一国の教育水準は、単にその最先端だけでなく、とりわけその平均値が、その国の生産力の水準を決定付けるのです。学歴とか、能力というものを馬鹿にしてはいけないのも、個々の人についてではなく、教育水準や平均値と関係するからなのです。戦後日本が、驚異的な高度成長をはたすことができたのは、これからもおそらく果すであろうが、戦後世代の子供たちがきわめて高い学力（したがって潜在的労働能力）を身につけたからであって、決してその逆ではないということは、とくに強調しておきたいと思います。（ですから、テーマにある「やる気を引き出す」云々は、ずいぶん水準の高い要求なのです。）

しかし、「現代」は、生産・労働の時代であると共に、非生産・非労働の時代なのです。学校は、相変わらず労働力の再生産を目的としながら、同時に、非生産の時代に応じた在り方をしなければならないので

す。学校は、就職のために入ると同時に、いつまでも職に就かなくてもいいために、通う場所になります。いうところの、モラトリアムですね。社会と個人との両方において、学校のもつ意味が変わりつつあるのです。その新しい意味においては、従来の学歴とか能力とかは、ほとんど問題にならなくなります。「現代」では、子供は「小さな大人」であるというかわりに、(立派な)大人が「大きな子供」である、というべきなのでしょう。

[4・2] 近代以降、大人と子供は、根本的に異なる存在になりました。子供は、かならず、大人になる。しかし、子供は、別なものになるのです。子供を、連続的に拡大したものが大人というのではないのです。この事情から、大きな困難が生じます。

第一に、親、大人の理解する子供は、親の記憶に他ならないということです。逆に、子供の理解する親は、子供の予見なのです。記憶は、過去の事実、出来事の再現ですが、忠実な再現ではありません。あくまでも、現在の、大人の地点からする、セレクトされた「過去」なのです。もっとも普通の「過去」像は、現在の大人へと結果した「過去」です。現在と無関係な過去は、つまり、記憶に残っていない過去は、はじめから消去されているのです。

ですから、第二に、親が子供を理解するのは、大変難しい、ということになります。親の「記憶」に依拠しないアプローチが必要になる。いくぶん乱暴に言えば、親は、理解不能なものとして、子供に対処しなければならないのです。子供を、まずもって、個人としてではなく、平均値において、構造としてつかまなければなりません。こういう仕方は、普通の親たちには、とうていできかねます。(科学的=学問的知見を必要とします。)

第三に、親は子供を(ごく簡単には)理解しうる立場にないのだから、親=大人は大人の立場を主張する他ないのです。もとより、自分が理解しえないものを相手にしているのだという自覚をもって、です。この自覚がなければ、何もなりません。こういう振舞いは、簡単なようで、存外難しいのです。

子供は、親の分身です。少なくとも親はそう思っています。そういう分身に対して、他者として、他山の石として、振舞うというのですから。親は、子供の悩みを解決できないということを知ったうえで、何事かをするとしたならば、手助け、補助、助言以外にないのです。自分の分身とも思っているものに、手助け以外にできないのです。もっとも、忍耐がいるのですね。しかも、承知しておくべきことは、子供も、自分がなにものか、分からないということです。(少しも不思議なことではありません。子供には、まだなにものであるというべきものが結果していないのですから。)理解すべきものを前にして、理解できないもの同士が、対面している、というのが、親と子の関係なのです。しかも、顔・体つき、性格、行動パターン等が、そっくりなもの同士がです。

[4・3] 子供は、不可避的に、他者に、別なものになります。自分の予見とは違うものになります。

第一に、無関係になるわけではありませんが、別な家族、あるいは生活形態をうることで、他者になります。自分がそこで成長した家族の成員とは異なる人間になるのです。だから、第二に、大人になるためには、そこに属していた家族人としての在り方とは違う、新たな人間関係を再建しなければならないのです。親は、これに対して、一つの範例となりうる場合があります。(負の教訓、を含めてです。)

第三に、子供は、新しい人間関係を樹立できなければ、大人になれないのです。そして、大人になり、親になることによってしか、特殊で具体的な他者としての人間関係を理解できないのです。

こういう子供というものを前にして、親は、何事かを判断しなければならないのですから、たいそう困難なのです。

[5] 次に、「やる気」です。特定して言えば、「勉強する気」です。

［5・1］　「勉強する気」、親や教師が自分のやってきたことを考えてみれば、これが、自然にわいてくるなどというのは、まったく不可能だということが分かります。ところで、「やる気」とは、平たく言えば、競争心ということです。序列、点数、学歴、ポストをめざす功名心です。しかし、あらかじめ言っておけば、満足するような結果がえられた場合、学歴のない親は、馬鹿にされるのが関の山だということです。嫌味な人間ができるということです。

しかし、もっと恐ろしいのは、競争心さえないと、受験勉強さえもしないと、どうしようもないということになるのは事実だ、ということです。なるほど、私たちでさえ、それほど立派でないにしろ、ちゃんと生きてこれている。ところが、今日、学校の外では、家庭の内・外を問わず、競争心をわかすようなし方での活動がほとんどみられなくなっている。スポーツも、ごく普通の教育の一環になってしまったのです。ですから、教育の場でしか、やるべきことの意味を発見しにくい社会になっているのです。

勉強以外のことで、子供に「やる気」をもたすのは、例外的、一時的感動以外には難しいのです。ですから、五〇％大学進学時代には、東大出は、やはり、均していうと、いい仕事をしているということになるのです。（競争のもつ、今日的で、肯定的な意味を忘れないでほしいと思います。）

［5・2］　「やる気」が重要だとして、それはどういうことを指しているのでしょう。第一に、集中力です。これをもつことは、大変難しい。偏執症の時代はすぎ、分裂症的、価値多元時代になっているからです。何事にも、こだわるということが少なくなったからです。大人とて、同じですね。

第二に、持続力です。これは、存外あります。

第三に、失敗などから立直る、反発力です。今の子供は、しなっとして、反発力がないようにいわれます。しかし、よく観察してみるとよいと思います。多様な価値体系があるから、一面で失敗しても、他方面で頑張れる、ということがあります。

［5・3］　「やる気」ということを、総合力としてみれば、「現代」の子供たちが。平均値において、歴史上、一番もっている、といってよいのです。まさか、と思うかもしれませんが、本当なのです。

第一に、教師（私も含めて）は、今の若い者はダメだ、式のことをよくいいます。これには、あまり根拠がありません。むしろ、教師たちは、自分たちの若いときのことを思い出して、それと同じようだとみなしているのです。自分の（ダメな）経験で、推し量ってです。

第二に、親（私も含めて）です。これはもう、自分の胸にてを当ててみれば、すぐ分かりますね。

第三に、会社や社会の評価です。大学出は使いものにならない、といいます。（もしこれが本当ならば、大学出を雇うなどという愚行はなくなっていると思います。）

今の子供は、「やる気」がない、というのは相当に根拠があるようですが、本質的に誤っているのです。それに、「現代とは、常に最悪である」（ニーチェ）のです。

［6］　しかし、今の子供たちは「やる気」がない、と繰り返しなされる評価は、どこからでてくるのでしょうか。この手の評価は誤っているにしても、その由来について考えてみる価値はあります。

［6・1］　「やる気」のなさと、今の子供たちは保守的だということが、結び付けられます。

しかし、保守的だということを、無批判的であるとみなすならば、間違いを犯します。本当のところ、今の子供たちは、きわめて批判的なのです。口先だけのものではなく、知見も広く、手強いのです。何よりも、批判力の大きさと底辺とか拡大しているというべきです。ただそれを、人前で大っぴらに語ることを、恥ずかしいと思うほどには慎み深くなっているのです。

いうまでもありませんが、保守的であるとは、必ずしもそれ自体において、非難されるべきことではないのです。今、革新といわれる人たちは、戦後的価値を「保守」しようとしています。これにたいして、元来、「革新」とは、「革新官僚」のことで、戦争を強行しようとした維新グループのことなのです。右からの革新、ということです。そして、何よりも注目すべきは、自主的であるということです。リーダー主義ではないのです。概して、付和雷同型ではなく、自分なりの選択肢をもっています。

［6・2］　また、今の子は、「軟弱」だといわれます。第一に、社会全体がソフトであることからくる性格づけですね。しかし、子供（ばかりではないが）にとって剛直な時代を想起してください。ハードでラフな時代です。軍事体制、危機、戦争、敗戦、どれをとってもまともな時代ではありません。それに、今日のヤワラカサは、柔構造なのであって、決して、ヤワなのではないのです。「重層的非決定」（吉本隆明）ということです。

第二に、身体的に弱くなった、といわれます。足腰が弱くなった、すぐ骨がおれる、というぐあいにです。弱くなったことは事実です。正確には、部分的事実です。というのも、身体のもつ総合力は、疑いもなく上がっているからです。（ルソーは、力＝精神力＋肉体力＋財力、といいました。マルクスは、力＝身体に内在する精神的・肉体的能力の総体、といいました。）

私などは、むしろ問題は、今の子供たちが、力をもてあましている点にあると思います。この力は、学校内外での受験勉強だけでは、消化できないのです。しかも、この力を吸収する場が、どこにも用意されていないのです。これが現状ではないでしょうか。

［6・3］　「やる気」のなさは、外へと出ていかないこと、自閉症、と結び付けられます。自分本位で、排他的、非社会的、というわけです。だから、何事にしろ、消極的になる、と非難されるのです。

しかし、自分中心主義は、戦後子育てをした私たちの親が範をたれたのです。私中心主義（ミイイズム）、家族中心主義（マイホーム主義）、企業中心主義、地域中心主義、日本第一主義、などなど。その子や孫たちには、ナショナリズムぽいのがなくなったぶんだけ、まだまだしなのです。

今の子は、しかも、決して、反社会的なのではありません。持ち場に出れば、十分に力を発揮します。社会の通念を知っていますし、これだけコミュニケーションが発達しているのですから、社交的でもあります。それに、自己表現力のことを考えてください。

何よりも、会社中心主義、国家主義よりも、うんと生き方に幅があり、それだけ強靱だということになるのです。

［7］　だから、「やる気」を今以上に引き出すためには、教師、親、社会が、率先して範をたれる他ないのです。これこそ、実現不能ですね。それに、大人が、やれもしないことに、変にやる気をだすと、ろくなことしか起こらないのです。

［7・1］　しかし、そうではあっても、常に励ましと叱咤が必要なのです。馬に鞭と人参をやるように、です。泥棒をした親であっても、子供に泥棒をしてはいけぬ、というべきなのです。いわねばならないのです。もとより、説得力を期待するわけにはいきませんが。

［7・2］　しかも、自らの実態がどうであれ、自分たちはぱりっとしていた、おまえたちのようにだらしなくなかった、という必要はあるのです。つまり、自覚した嘘をつく必要、ですね。「高貴な嘘」（プラトン）の技術は、しかし、もっとも難しいものの一つですから、誰にでもできるというものではありませんが。

［7・3］　さらに、あるべき理想を語ることは、もっと大切です。友情、夫婦愛などは、手にとれるような形では、あるべき姿として存在してはいません。フィクションである、というべきでしょう。しかし、そのままの姿として存在しなくても、私たちは、それを要求しま

す。もっとも、この要求の仕方が難しいのです。ただの無いものねだりに終わるというのがごく普通なのです。

私たちは、効果ということを第一に置くのならば、以上のことは、ほとんど無駄に等しいことになります。しかし、無駄であろうが、嫌われようが、なされるべきことはあるのです。そして、実際、人間の歴史は、この無駄のうえに、その発展を勝ち取ってきたのです。だから、我々とて、手を抜いてよいという訳にもいかないのです。

［8］　ですから、子供はすでにして「やる気」をもっているのだから、それを引き出すなどという手間をかけたり、そのことに思い悩むなどという必要はない、といいたいのではありません。問題は、こうなのです。

［8・1］　「現代」とはどういう時代か、「子供」とはなにものか、「やる気」とはどういうことか、を十分承知せずに、手間をかけたり悩んだりすると、よい結果が出ないばかりか、逆効果になるのです。

［8・2］　ところが、よくしたもので、たとえ、子供のことであれ、自分以外の人間について、自分と不可分の場合は別として、ひどく思い悩むようにはできていないのが、人間なのです。忘れっぽく、根気がなく、自分が一番可愛いらしいのです。これは、一見すると、非難に値するようです。しかし、かならずしもそうではない。アダム・スミスもいうように、「共感」とは、利害関係のない人、遠くにいて顔も知らない人にもつことができるのであって、その逆ではないのです。「利己心」にたいして、「共感」する能力を、スミスは、理性としました。前者の能力は、パッション（感情）です。

［8・3］　繰り返すようですが、たいして効果がなく、無駄だと知りつつ、子供に期待し、自分たちができなかったことの望みを子供達につなぐ、というのがこれまで人類の行ってきた歴史経験なのです。しかし、有り体にいえば、子供達の未来にだけ夢があるような社会は、本質的に、不幸なのです。ソ連の教育熱心さが、まさにそうです。

［補］　最後に、冒頭で指摘しました、すぐにできる、効果的なハウツウについてのべましょう。

［補・1］　まず、資金です。莫大な金をかける。家庭教師はもとより、留学、等など、方法はいくらでもあります。ただし、教育を投資と思っている人には勧めれません。（どれくらいかけたらということでしたら、月百万円くらいですね。）

［補・2］　軍隊式（スパルタ式）です。これは長続きしないだけでなく、得られた結果も、一時的で、すぐに忘れられて身につかない、ということになります。非常時の、即効を求める場合に限ってということですから、教育には不向きなのです。

［補・3］　放任、です。これは、労力もいらず、簡単で、しかも一番効果がある。しかし、本当のところ、至難の術なのです。自分の分身で、しかも、常に視界のなかにいるものを、無視ないし見捨てるふりをしつづけるのは。つい、口が、手が出てしまいます。

［補・4］　以上すべてに徹底できないひとは、人間の親がそうしてきたように、なきおとしのほかないのです。そして、これが、経験上、一番効果があるのです。母の涙には勝てません。

今、私たちの眼前にいる子供達も、いずれ、親になります。わたしたちがそうであったようにです。諦めずに、そして、焦らずに、付き合っていきたいものです。